

4. III群B類土器の特徴

十日川5遺跡から器形・文様構成がよくわかるIII群B類土器が出土した。これらには住居跡・土壙墓・土壙も検出されており、III群B類土器期の良好な資料といえる。また、北明1遺跡からも器形が復原できたIII群B類土器1個体が出土した。ここではこれらの土器の器形・文様構成等の特徴を述べるとともに、同類土器の研究史をふりかえるなかから編年上の位置付けについて述べる。

(1) III群B類土器の特徴

十日川5遺跡

III群B類土器の特徴は次の通りである。

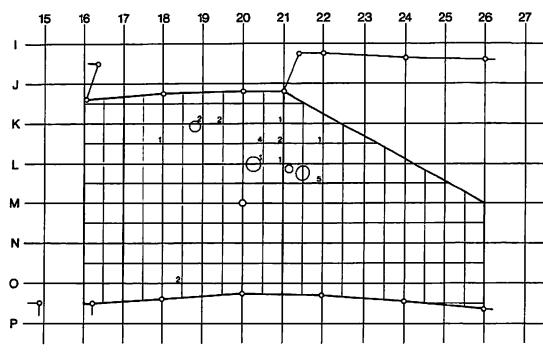
器形：口頸部のくびれが弱く筒形に近い器形のもの（図IV-12-1、図VI-18-1、図VI-27-1、図VI-28-4・5）、口頸部のくびれが弱く、底部から開きぎみにストレートに立ち上がるもの（図VI-27-1）とに分けられる。体部のふくらみは概して弱い。

口縁：緩やかな波状のもの（図VI-27-1、図VI-30-31～36、図VI-31-41～44、図VI-32-56、57等）、平縁に部分的に粘土を貼付け小さな突起を作り出しているもの（図VI-12-1、図VI-18-1等）とがある。

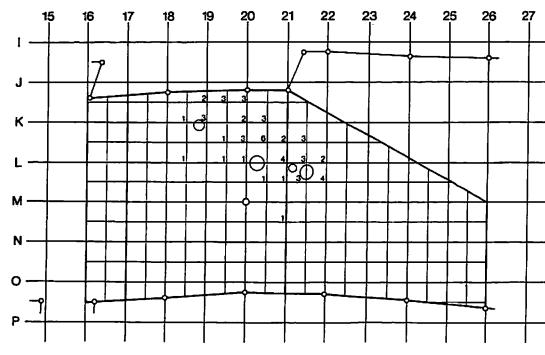
底部：平底と揚げ底がある。底部端部は張り出し、底面にも縄文が施されているものが多い。底部側面や底面の揚げ底の縁辺部に縄の押圧が加えられているものもある。底部内面に貼付突起が認められた。

口唇部文様：明瞭な粘土紐の貼付帯が施されていないものと、施されてるものとがある。前者は口縁部が波状気味のものが多く、後者は、口縁が平縁で、部分的に粘土を貼付け小さな突起を作り出しているものが多い。いずれも断面形は角形のものが多く、前者には少量ではあるが、断面形が切り出し状で、天神山式との関連を想定できるもの（図VI-30-31～34）もある。文様は、縄端圧痕文のみのもの、竹管文のみのもの、縄端圧痕文+竹管文、爪形文+竹管文、爪形文・指頭押圧のみのもの等がある。縄端圧痕文+爪形文は認められなかった。縄端圧痕文と爪形文の施文位置はほぼ同位置に施文され、本遺跡の資料を見るかぎり爪形文は、縄端圧痕文のかわりに施文しているように思われる。

口頸部文様：口頸部文様は明瞭に区画されず、下端を区画する貼付帯が認められたものは1例のみで（図VI-31-41）である。突起から垂下する貼付帯は縦位に1条施されたもの



縄の圧痕が加えられたもの



爪・指頭の押圧が加えられたもの

図IX-4-1 III群B類口縁部破片の分布

が多く、少量ではあるが「逆V字」状のものも認められた（図VI-30-35・36）。口頸部文様帶には刺突文・押引文・沈線文がほとんどで、刺突文施文後に縄端圧痕文を加えたものが1個体出土している（図VI-12-1）。縄線文は認められなかった。

地文：L Rの斜行縄文が最も多く、少量ではあるがR Lの斜行縄文、羽状縄文、Rの斜行縄文、撚糸文がある。口縁部内面・底面にも不規則な縄文が施されているものが多い。Rの斜行縄文は、体部縄文がL Rの斜行縄文が多く、L Rの前段階の原体であることに起因するものと思われる。

胎土：纖維・砂粒を多く含むものと、纖維と小礫を含むものとがある。

施文順序：体部地文の施文→口縁部突起の貼付→口縁部肥厚帶の貼付→口縁部肥厚帶への施文→口頸部文様帶の施文（貼付帶→刺突文）である。この様な施文順序は円筒系土器に見られる施文順序と類似する特徴といえる。

住居跡が4軒検出され、その北東側にIII群B類土器の集中が大きく4か所認められた。このことからIII群B類土器集中ごとの違いを求めるために口唇部文様の施文具による細分を行った。その結果、縄、竹、爪形文・指頭に分けられたが、竹は他の施文具と併用され、縄と爪・指頭は併用されないことが判った。縄と爪・指頭による文様に時間差を想定して施文具別に分布図を作成した（図IX-4-1）。しかし、明確な分布の違いは認められなかった。

北明1遺跡

復原土器が1個体得られている。特徴は次の通りである。

器形：張り出した底部下端部から丸味をもちらがら立ち上がる。体部上半で強くくびれ、口縁部で外反する。体部は膨らみをもつ。

口縁：波状である。

底部：揚げ底で、底面には不規則な縄文が施されている。また、口縁部裏面にも不規則な縄文が施されている。

口唇部文様：口唇直下に貼付帶が施され、半截竹管状工具による刺突文・沈線文が加えられている。

口頸部文様：半截竹管状工具内面による2本一組の縦位の沈線文が加えられたのち、2条の2本一組の沈線で区画している。部分的に棒状工具で横位に刺突文が加えられている。

地文：不規則な斜行縄文である。

胎土：纖維・小礫・砂粒を多く含み脆弱である。

施文順序：体部地文の施文→口縁部突起の貼付→口縁部肥厚帶の貼付→口縁部肥厚帶への施文→口頸部文様帶上端の区画→口頸部文様帶の施文（貼付帶→刺突文）→口頸部文様帶下端の区画である。施文順序は十日川5遺跡と同様である。

以上のように十日川5遺跡・北明1遺跡のIII群B類土器の特徴はまとめられる。

そして両遺跡のIII群B類土器は、口頸部文様帶の構成、文様要素として貼付帶、竹管状工具による刺突文・押引文・沈線文、整形、施文順序等は基本的には一致し、ほぼ同様な特徴をもつものといえる。この特徴は、道東や十勝地方の中期後半に位置付けられているモコト式に相当するものと思われる。

しかし、十日川5遺跡・北明1遺跡の資料を詳細に観察すると、器形は、十日川5遺跡

が筒形ないし開き気味立ち上がるのに対し、北明1遺跡の資料は、頸部のくびれが強く、体部がふくらむ。また、北明1遺跡で認められる口頸部文様帶の区画は、十日川5遺跡ではほとんど認められず、口頸部文様は、十日川5遺跡は横位、北明1遺体は縦位に構成されている。このように遺跡毎に器形・文様構成等において微妙な差違が認められる。

本資料を見る限り十日川5遺跡出土資料のような筒型ないし底部から開き気味に立ち上がる器形で、口頸部文様帶の区画文ともたないものと、北明1遺跡の資料に類似した体部に膨らみをもつ器形で、口頸部文様帶が区画されたものとに分けられそうである。

そして、十日川5遺跡出土資料は、清水町共栄3遺跡（野中1989）で突起の形態、口縁部縄压痕、結束羽状縄文等から萩ヶ岡1式に比定され、円筒土器上層式に系譜が求められているIII群a類の特徴的文様要素である縄端による押压文が口頸部文様帶に施されたもの（図VI-12-1）や、共栄3遺跡や網走市大曲洞窟遺跡（児玉1955）等で認められている底部側面や揚底底面縁辺部の縄压痕文が認められることからモコト式の古い段階に位置付けられる可能性がある。

しかし、これまで器形の判る資料が出土した遺跡には、釧路市貝塚町1丁目遺跡（永峯1981）、網走市大曲洞窟遺跡、美幌町ピラオツマッコウマナイチャシ遺跡（荒生1985）、帶広市宮本遺跡（佐藤1986）、富良野市東山4遺跡（杉浦1989）、同無頭川遺跡（杉浦1992）等があるが、資料が少なく現在のところ明確な細分はやや困難な状況といえる。

（2）モコト式土器の研究史

モコト式は、藤本強によって網走市モコト神社裏の貝塚（モコト貝塚）出土の資料をもとに「北筒式直前の形式」として仮称された土器群である（藤本1972）。宇田川洋は、藤本の考えを踏襲し、モコト式の類似資料を示し、明確な記載がないままモコト式を尖底・平底によって「モコトI」・「モコトII」に細分し、円筒土器上層b式の頃に位置付けている（宇田川1977）。

そして、上野秀一によって道央部で柏木川式が設定され、柏木川式との関連でモコト式に論及し、「文様構成上で類似がある点からみても、「モコト式」といわれるものは、大曲例を除いていずれも「紅葉山式」、「柏木川式」の範疇に入る可能性が高い」と指摘した。そして、「紅葉山式」、「柏木川式」に先行する天神山式はサイベ沢VII・見晴町とも並行関係が想定される「トコロ6類」の段階に、「紅葉山式」・「柏木川式」は大安在B式の頃、トコロ5類（観音山、羅臼式など）に位置付けた（上野1978）。

藤本は、上野に反論するかたちでモコト式の位置付けについて「纖維尖底土器群が道南より長く続いていたことは確実であろう」とし、纖維尖底土器群と円筒式土器群との中間にあたる土器群として、北筒式土器直前に位置付けた（藤本1979）。藤本によってモコト式の標識土器が示されたのは1980年である（藤本1980）。

そして、藤本の説明するモコト式の特徴は、次のように要約される。

- 1) 器形は底部からあまり屈曲がなく、口縁部にいたる比較的単純な器形。
- 2) 口縁部は平縁を主体とし、稀に山形突起をもつものもある。
- 3) 底部はやや張り出す平底と乳房状尖底で内面に縄文が施されている。
- 4) 文様は地文は、L Rの斜行縄文が多く、Rのものもあり、縄文原体の基本はlになっているものがほとんどで、口縁部内面・底部底面にも施文されるものが多い。

5) 口縁は折り返し口縁部で、口縁部に水平もしくは垂直に隆起帯がある。口唇部・口唇部内部・隆起帯・頸部文様帶に特徴的な円形施文具で突引き、刺突、短刻線・沈線等が施されたものが多く、縄の圧痕、指頭による刻み等もある。

6) 胎土は纖維を含み、稀に少量の纖維と砂粒を混じているものもある。

また、モコト式の先行型式については「直接続く土器を探することは困難」としながらも「胎土に纖維が入っていること」「尖底が認められること」や石器や遺跡の立地・規模等が一連のものであること等を根拠とし、縄文前期の「胎土に纖維を含む尖底土器群からいくつかの段階を通り、モコト式に達した」とした（藤本1980）。そして、モコト式の隆起帯については「隆起帯のありかたは円筒上層a・b式のありかたに通じるものがある」と述べ、「北筒式の前身であることが確実であろう」と述べている（藤本1981）。

大沼忠春は、「大まかな編年的見通しを述べたもの」としながらも、「貼付帶・刺突文・縄線文などで特徴つけられる資料を広く含め」て柏木川式を設定し、柏木川式を天神山式に後続する土器型式として位置付けた。そして、モコト式については「大曲洞窟出土の北筒I（児玉1955）、近年提唱されているモコト式も柏木川式の系列に属するものとみなすことができる」とし、類似資料として道南部大安在B式、道央部の柏木川式があり、大木9式相当と指摘している。そして、モコト式は「ほぼ全道を覆う北海道独自の文化の一端を形成していたもので、道東の北筒式の母体をなしたもの」とし、柏木川式については、道央部の北筒式の母体と位置付けた（大沼1981）。

以上のように、モコト式の系譜・編年的位置付けについては藤本、上野、大沼等の論考があり、いずれも北筒式の前身と位置付けながら佐藤訓敏が指摘しているように大きく2つの見解があるといえる（佐藤1983）。つまり、藤本・宇田川等が主張する円筒土器上層a・b式に並行する所説と、トコロ6類・トコロ5類の編年的位置付けについて異なるが大沼・上野が主張する柏木川式並行という説である。

(3) モコト式の位置付け

モコト式の位置付けを考える上で柏木川式は重要である。柏木川式は上野秀一によって恵庭市柏木川遺跡4号住居跡出土の資料を標識として設定され、その特徴は『4個の小突起とそれから垂下する貼付文、その下部を1本の横環する貼付文によって限る、口唇部直下にも貼付文が横環する場合がある。貼付文上と口唇部から下部の横環する貼付文間には範ないし棒状工具にとって連続刺突文、押引文、指頭による押捺が横に施される。地文は単節斜行縄文、第二種結束、結節と内面縄文がある。器形は底径が小さく胴中央部が膨らむ。』という（上野1987）。この柏木川式の特徴は、モコト式の特徴とほぼ共通していると考えられる。

柏木川式の良好な資料として江別市萩ヶ岡遺跡のIII₁文化層出土の土器群があり、高橋正勝によって萩ヶ岡4式が設定されている（高橋1982）。萩ヶ岡遺跡において、層位的に萩ヶ岡1式から萩ヶ岡4式に細分され、多少の型式的認識の違いはあるもののサイベ沢VIIa、サイベVIIb、天神山式、紅葉山・柏木川式への比較的スムーズな変遷が認められている。

モコト式についても、近年の調査で、共栄3遺跡のIII群a類、ピラオツマッコウマナイチャシ遺跡の第VI群土器・第VII群土器、芽室町祥栄1遺跡のIII群A類等のようにモコト式に先行しそうな土器群が確認されている。十日川5遺跡のモコト式にも、天神山式の突起直

下に認められる貼付瘤のなごりのような貼付瘤や器壁に高まりが認められるもの（図VI-30-36・55）がある。また、藤本・宇田川等によって乳房状尖底とされたものが底部内面突起であることが確認され（大橋1982）、佐藤も指摘しているように尖底土器群との関連からモコト式の系譜を考えようとする藤本の「尖底土器群→十→モコト式」という変遷には無理があるように思われる（佐藤1983）。モコト式は上野、大沼の天神山式に後続し、「道央の柏木川式の系列に属するもの」という考えが妥当なものと思われる（上野1978、大沼1981）。

モコト式の細分については、宇田川（宇田川1977）、沢四郎（沢1979）、佐藤（佐藤1983）、柴田（1986）、大沼（大沼1989）等による可能性の指摘がある。しかし、いずれも明確な資料が示されず、可能性の指摘にとどまっている。十日川5遺跡のモコト式について器形・文様要素から先述のように古い要素が認められることからモコト式の古い段階に、そして、北明1遺跡のモコト式については新しい段階に位置付けられる可能性があることを指摘した。文様構成は異なるが北明1遺跡のモコト式に類似するものとして宮本遺跡（図28-5）や東神楽町沢田の沢遺跡出土のもの（図139）等があり、貼付帯の発達、地文として結束羽状縄文が用いられ、後続する北筒式より深い関連が想定できそうである。同様な土器は萩ヶ岡遺跡II₂文化層からも出土している（図46-7）。これはIII₁文化層にほとんど認められない体部が膨み、地文が結束第2種のものである。この様な器形を呈す資料は、苫小牧市静川21遺跡（佐藤1992）でまとめて出土している。体部は斜行縄文で、縄圧痕文が加えられた貼付帯が多用されている。この資料は大沼によって「貼付帯・刺突文・縄線文などで特徴づけられる資料」として柏木川式とされたものと思われる（大沼1981）。静川21遺跡では萩ヶ岡4式を混じえず、遺構に伴って出土している。したがって、柏木川式もモコト式と同様に細分の可能性があり、萩ヶ岡4式は古い段階に、静川21遺跡の資料は、後続するノダップII式との関連がうかがえることから新しい段階に位置付けられるかもしれない。

そして、道北部において天神山式に相当しそうな土器群として智東式が想定されている（大沼1989）。そして、近年の調査で天神山式に後続し、柏木川式から北筒式への移行期に相当しそうな土器群として音威府村咲来2遺跡のIII群2～4類土器が確認されている（佐川1992）。同III群2類土器に類似した資料は、体部縄文が羽状縄文と斜行縄文と違いが認められるが、江別市大麻1遺跡H-6（道埋文1980）、同高砂遺跡H-29（高橋1988）で柏木川式と併せて出土しており、同III群2類土器と柏木川式との並行関係はほぼ確実と思われる。智東式に後続し、同III群2類土器、同III群3類土器、道北部の北筒式（同III群4類土器）に移行したものと考えられる。

（熊谷 仁志）

引用参考文献

- 上野秀一 1978 「石狩海岸砂丘地帯の遺跡群について」 『北海道考古学』 14
- 宇田川洋 1977 『北海道の考古学 1』 北海道出版企画センター
- 大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」 『考古学雑誌』 66-4
- 大沼忠春 1989 「北筒式土器様式」 『縄文土器大観 1』 小学館
- 大橋秀規 1982 「底部内面に突起のある土器」 『川上B遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
- 児玉作左衛門・大場利夫 1955 「網走市大曲洞窟出土の遺跡について」 『北方文化研究報告』 10
- 小林敬・荒生健志 1985 『ピラオツマッコウマナイチャシ遺跡』 美幌町教育委員会
- 佐川俊一 1992 『咲来 2 遺跡・咲来 3 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
- 佐藤訓敏 1983 「猿別 C 遺跡の土器に関する若干の考察」 『猿別 C 遺跡の考古学的調査』 幕別町教育委員会
- 佐藤一夫ほか 1992 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群IV』 苫小牧市教育委員会
- 杉浦重信 1989 『東山郷土史』 東山郷土史編纂委員会
- 杉浦重信 1992 『無頭川 II 遺跡』 富良野市教育委員会
- 沢四郎 1979 『北海道の土器』 『世界陶磁全集 1』 小学館
- 柴田信一 1986 「第 6 章土器について」 『宮本遺跡』 帯広市教育委員会
- 高橋正勝 1971 『柏木川』 北海道文化財保護協会
- 高橋正勝 1972 「北海道における中期の終末（1）」 『北海道青年人類研究会会誌』 9
- 高橋正勝ほか 1982 『萩ヶ岡遺跡』 江別市教育委員会
- 高橋正勝ほか 1988 『高砂遺跡（4）』 江別市教育委員会
- 永峯光一 1981 『縄文土器大成 2』 講談社
- 野中一宏 1989 「共栄 3 遺跡出土の縄文時代中期の土器について」 『清水町上清水 4 遺跡・共栄 2 遺跡・共栄 3 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
- 藤本強 1972 「常呂川下流域を中心とした地域の一般調査と竪穴群の測量」 『常呂』 東京大学文学部
- 藤本強 1976 『トコロチャシ南尾根遺跡』 常呂町
- 藤本強 1979 『北辺の遺跡』 教育社
- 藤本強 1980 「モコト貝塚表面採集の土器」 『ライトコロ川口遺跡』 東京大学文学部
- 藤本強 1981 「縄文中期の土器－北海道－」 『縄文土器大成 2』 講談社
- 北海道埋蔵文化財センター編 1980 『大麻 1 遺跡・西野幌 1 遺跡・西野幌 3 遺跡・東野幌 1 遺跡』